中学校劇名作全集

下巻

日本演劇教育連盟編

中学校劇名作全集

下　巻

日本演劇教育連盟編

912

日本演劇教育連盟
中学校劇名作全集　下巻
国土社　1968
252p　22cm

基本カード記載例

日本演劇教育連盟

1937年に創設され，はじめ日本学校劇連盟と称したが1859年に改称された。幼児から小，中，高校までの教師および児童演劇，サークル演劇の活動家，学生によって組織される自主的研究団体。月刊の機関誌『演劇と教育』を発行。

会長＝菊田要，事務局＝東京都豊島区池袋2の3の3
電話（984）4625　郵便番号 171

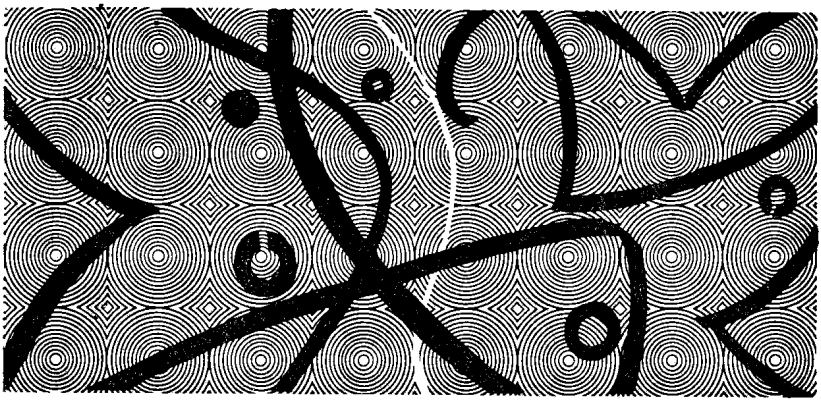
中学校劇名作全集／下巻

1968年10月15日　初版発行
1978年10月25日　11版発行

定価 1,200円　検印廃止

編　者　日本演劇教育連盟
発行者　長宗泰造
印刷所　株式会社 厚徳社

発行所　株式会社 国土社
東京都文京区目白台1—17—6
電話（943）3721（代）
振替　東京6-90631
郵便番号　112



まえがき

日本演劇教育連盟では、一九五四年に、『日本学校劇名作全集』全四巻を編集し、その中の一巻を〝中学校用〟にあてました。それは、〝はっきりした学校劇運動の立場に立って、学校劇脚本の遺産を整理し、今日の学校劇のレパートリーを確立しようという明確な意図をもって編集されたもの〟でした。

さいわいわたしたちの意図は生かされ、このシリーズの〝中学校用〟一巻におさめられた作品群は、その後の中学校演劇の標準的レパートリーとして、全国の中学校で広く上演されました。

それから十五年の間に、中学校演劇にも、大きな発展があり、すぐれた作品も数多く発表されました。そこで、その成果をとり入れ、先の版を改めて決定版二冊とし、新しいよそおいで刊行することにしました。

この二巻が、これからの中学校演劇の道標として、広く活用されることを念ずるものです。

日本演劇教育連盟

もくじ

こうして豆は煮えました　〈一幕〉……久保田万太郎……5
・登場人物＝男6人、女2人・上演時間＝約60分
飢餓陣営　〈一幕〉……宮沢　賢治……33
・登場人物＝男13人・上演時間＝約40分
ふるさとの英世　〈二幕〉……宮津　博……47
・登場人物＝男5人、女2人　・上演時間＝約45分
海彦・山彦　〈三景〉……戸塚　博司……62
・登場人物＝男8人　・上演時間＝約30分
あまのじゃく　〈一幕〉……加藤　道夫……75
・登場人物＝男7人、女2人、その他　・上演時間＝約35分
空の勇者リンドバーグ　〈よびかけ〉……栗原　一登……95
・登場人物＝男・女大勢　・上演時間＝約30分
緑の星の下に　〈一幕〉……岡　一太……111
・登場人物＝男7人、女2人　・上演時間＝約35分

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もくじ

夕ばえ　〈一幕〉……森　康宥……127
・登場人物＝男4人、女2人、その他　・上演時間＝約45分

さようならロバート　〈二場〉……冨田　博之……145
・登場人物＝男5人、女7人、その他　・上演時間＝約30分

まっかっかの長者　〈一幕〉……生越　嘉治……160
・登場人物＝男7人、女1人、その他　・上演時間約70分

みんなにきこえない夜　〈詩劇〉……森田　博……187
・登場人物＝男5人、女2人　・上演時間＝約25分

だれかがよこした小さな手紙　〈一幕〉……森田　博……200
・登場人物＝男4人、女5人、その他　・上演時間＝約25分

霧　〈一幕〉……小川　信夫……213
・登場人物＝男5人　・上演時間＝約39分

■作品と作者について……231

■楽　譜……246

■編集／日本演劇教育連盟

・編集担当委員

石原直也

副島　功

辰嶋幸夫

冨田博之

桃井恒春

■装置図／滝口二郎

谷川隆二

■装　幀／市川禎男

■カット／五百住　乙

こうして豆は煮えました

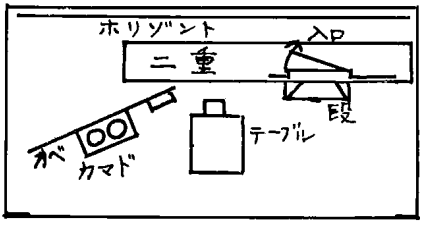
久保田万太郎作

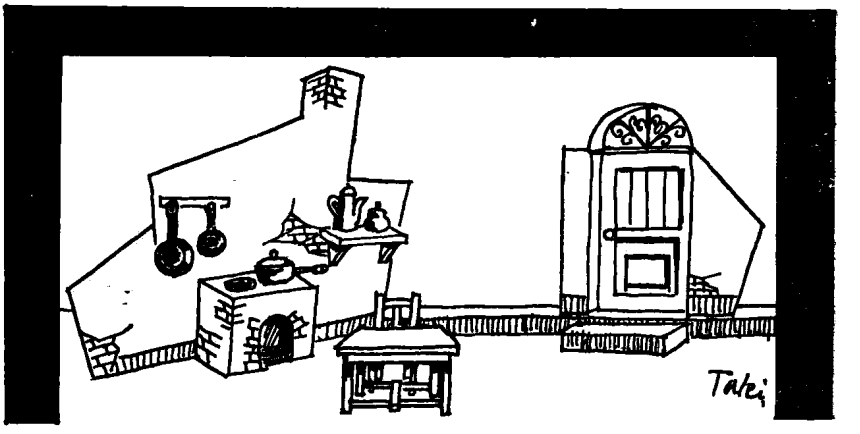
■**登場人物**＝男６人、女２人

■**上演時間**＝約60分

■**あらすじ**

おとなりの国と仲なおりの大宴会の晩、おぎょうぎの悪いしくじりをしたばっかりに、王女は捕えられて、きょうの12時を合図に「首切り」のお仕置きを受ける。大なべで豆を煮ている男の子の家へ、逃げこんできたのは王女。心のやさしい男の子は王女を奥の部屋にかくまってやる。時計が12時を打ち終われば王女の命は助かるという。しかし、男の子の家に、首きり役人が王女をさがしにやってきた。そばでは豆が煮えつづける。





登場人物

男の子
王女
手品師
近所のむすめ
めくら
歌うたい
首きり役人
口上

まくがあがると、舞台は台所。正面に、戸口（両開きのほうがいい）と、まど。（外にお城が見える）上手には、つぎのへやに通ずるドア。下手に、大きな調理用のストーブ。中央に、いす、テーブル、その他、かべには食器棚などがある。ストーブの上には、大きななべがかかっている。舞台にはだれもいない。

やがて子どもが上手のドアから出てくる。そしてなべのふたをとって見る。ゆげがサッとあがってお湯はグラグラ煮え立っているようすである。子どもはそれを見て棚からざるをおろして、なかのそら豆をなべのなかにザアーッとあける。そしてふたをしてまた出ていってしまう。

やや長い間。

口上が下手のそでから出てくる。

口上　（中央にきて）みなさま、きょうはよくいらっしゃいました。これから「こうして豆は煮えました」というお芝居をお見せいたします。ですが、私はこのお芝居へ出るんじゃアありません。私はお芝居のはじまらないうちにいろんなことをみなさまにお教えしておこうと思いまして今ここへ出てまいったのです。……さて、みなさん、ここはなんでしょう。……そうお台所ですね。もちろん日本のおうちのお台所ではありません。このお芝居が西洋のおはなしなんですもの。むかしむかしのそのむかし……それほどのむかしではありませんが、西洋の、あるお城のある町におこったおはなしです。ほら、あのまどからお城が見えるでしょう？（と、まどのところへ行ってのぞく）みなさんか

らは見えないかもしれませんけれど、あのお城には四つの高い塔が立っているんです。（もとへもどる）そしてその四つの塔には一つずつ時計がついています。大きいのが一つ、中くらいのが二つ、小さいのが一つです。あの四つの塔についている四つの時計はこのお芝居にとてもだいじな時計ですからよくおぼえていてください。そうそう、それからあすこに大きなおなべがかかっていますね。そして今、男の子が出てきてそら豆をいれていきましたね。あの子はこのうちの男の子なのです。そしておかあさんと二人でくらしているんですけど、今おかあさんはお買物にいっておるすです。あの子はたいへん感心な子ですから、おるすばんをしながらあっちのおへやで勉強しています。おかあさんが出がけにお昼に豆を煮ておきなさいといったのを思い出して、さっきああして豆をおなべにいれにきたんです。そうそう、もう一つおもしろいことを教えてあげましょう。あのお城できのうの晩、おとなりの国と仲なおりの大宴会があったんです。その時、王女さまがたいへんおぎょうぎのわるいしくじりをしてしまったんです。それでお城の法律によってきょうの十二時、あの四つの時計がなると同時にお仕置きになるんです。その王女さまはそれはきれいなかわいらしい方なんですけど、お首をきられるなんておかわいそうですね。けれども今朝っからその王女さまのすがたがお城じゅうどこをさがしても見えないんです。それで今お城では大さわぎをしています。さあ、その王女さまはどうなるでしょう。それはこれからはじまるお芝居をごらんになればわかります。とにかく、あのおなべのなかのそら豆が煮えるまでのあいだのお芝居です。（なべのところへいって、なかをのぞく）まだまだなかなか煮えません。そうそう私がここにこうしておしゃべりをしていては、お芝居がなかなかはじまりませんから、このへんで私はひっこみましょう。じゃ、みなさん、しずかにゆっくりごらんください。

口上、退場。

かみ手のドアから男の子がまた出てくる。

男の子　あーあっ、もう勉強もくたびれちゃった。おかあさん早く帰てくればいいなア。

男の子、なべのなかをちょっとのぞいて見て、いすにこしをかけ鼻歌をうたいはじめる。

――間――

王女がまどの外にしのび寄る。そして、なかをのぞきこむ。やがて戸をあけてそっとはいり後手(うしろで)にドアをしめてホッとする。大きなマントをはおっている。

男の子　（気がついて）おや、あなたはだれです？

王女　しーっ、しずかに。ぼっちゃん一人？

男の子　ええ。だけどあなたは、いったいどなたです？

王女　ね、ぼっちゃん。私をどこかへかくしておくれ、ちょっとのあいだでいいんだからだれにも見つからないところへかくしておくれ。

男の子　かくす？　あなたを？

王女　ええ。なんでもいいからかくしておくれ。私は今みつかると殺されてしまうの。

男の子　殺されるんですって？

王女　ああ、首をきられてしまうのよ。

男の子　首をきられるんですって？　あなたみたいにきれいな方がどうして首をきられなくちゃならないんです？

王女　私がおぎょうぎがわるかったから、私が作法にちがったことをしたからいけないのよ。

男の子　作法にちがったことってなんです？

王女　とてもいけないこと。そんなことをすれば首をきられるってお城の法律できまっていることをしてしまったのよ。

男の子　ホウリツ？

王女　ええ、法律ってのはね、王様のおきめになった規則のことよ。

男の子　でも、どうしてあなたがお城の規則で首をきられるんですか？

王女　それはね、私が王様のむすめだからよ。

男の子　王様の？　……じゃア、あなたは王女さまですか？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

王女　ええ、そうよ。

男の子　でも、おかあさんがいいましたよ。王女さまっていう方はとてもきれいでりっぱな方だって……あなたはとてもきれいだけど……

王女　（自分のすがたを見て）ああ、これを着ているからね。（と、マントをぬぐ。きらびやかな王女の服となる）どう？　これなら……

男の子　やあ、きれいだ。やっぱりあなたは王女さまにちがいない。

王女　わかったでしょう。ほんのちょっと、お昼すぎるまで私をかくしてくれればいいのよ。そうすればなんでもすきなものをごほうびにあげてよ。

男の子　ごほうびなんていらないけれど、あなたみたいにきれいなりっぱな方が首をきられるなんて……いくらでもかくしてあげますよ。……だけど、ぼくのところはこんなにせまいんですもの、どこがいいかな……。

王女　どこでもいいのよ。

男の子　うん、そうだ、いいところがある。おかあさんの寝床がいい。ねえ、でもそのまえに、どんなおぎょうぎのわるいことをして首をきられるのか教えてください。

王女　ええ、でもだれかくると……

男の子　ぼくがここから見ていてあげるから、だいじょうぶですよ。（と、まどのところにいく）

王女　じゃ、おはなししましょう。きのうの晩お城ではおとなりの国と仲なおりをしたお祝いの宴会があったのよ。その宴会で私、うっかりして大おば様のダイヤモンドのついたおくつをふんでしまったの。

男の子　ごめんなさいっていわなかったんですか？

王女　もちろんいったわ、でもね、だめなの。大おば様の宝石（ほうせき）のかざりのついたおくつをふむような不作法な王女は、あくる日のお昼にお城の塔の四つの時計がなっているさいちゅうに首をきられるという法律があるのよ。だから、どうしても私は、きょうのお昼にあの四つの時計がなっているうちに首をきられなくてはならないの。

男の子　そんなめちゃくちゃな規則なんてないや。どうしてそんなめちゃくちゃな法律なんてもの、やめてし

まわないんですか？

王女　それは私もそう思うわ。でも、私のちからではどうにもならないの、むかしからきまっていることなんですもの。でも私は首をきられるのはいやでしょう。だから今朝早くお城をぬけ出してこうしてにげてまわっているの。

男の子　だれが追っかけてくるんですか？

王女　私がいなくなったものだからお城では大さわぎをしてみんなして私をさがしまわっているわ。

男の子　でも、どうしてお昼までかくれていればいいんですか？

王女　それはね、法律によると、お昼をすぎて四つの時計が十二時をうってしまえば私の命は助かるのよ。

男の子　どうしてです？

王女　どうしても……それも法律なのよ。

男の子　へえ、法律って変なものなんだなア。（外を見て）あっ、だれかくる。王女さま、こっちへいらっしゃい。おかあさんの寝床へかくれてください。おかあさんは今お使いにいってますから、おかあさんのかわりに寝床へねていらっしゃい。だれかきたら、おかあさんは病気でねているって追っぱらってやります。

王女　ええ、ありがとう。

男の子　さ、早く。早く。

男の子、王女を上手のドアからつれていく。やがて一人で出てくる。そしてなにくわぬ顔で鼻歌をうたいながら歩きまわる。まどの外に手品師が通りかかる。そして、まどからなかをのぞく。これに気がついて男の子びっくりするのが知らぬ顔をする。

手品師　（まどから首を出して）こんにちは。ぼっちゃん一人ですか？

男の子　あなたはだれです。

手品師　エヘヘヘ。……私は通りがかりのものですがね。（鼻をヒクヒクさせて）おや、いいにおいだな、こりゃ豆のにおいだ。ぼっちゃん、豆を煮ているんですね。

男の子　そんなことどうだっていいじゃないか。第一ひとのうちをまどからのぞくなんて失礼だよ。

手品師　じゃ、ドアからはいらしてもらいましょうかね。

男の子　だれがはいっていいっていった？

手品師　まあ、そう私をきらわなくてもいいじゃありませんか。（ドアからはいってくる）ごめんください。こりゃなかへはいるとますますいいにおいだ。おや、このなべですね。（なべのほうにいきかける）

男の子　いけないよ、豆はまだ煮えやしないよ。いったいあなたはだれ？　お城のお役人ですか。

手品師　私ですか、私がお役人かっていうんですか？

男の子　……

手品師　私がお城のお役人だったらどうするんです？

男の子　あなた、ほんとうにお役人なんですか……。（だんだんあとずさりをしながらポケットからきれいなくさりを出す）もしあなたがほんとうにお役人だったらこのくさりをあげるから帰ってください。

手品師　ほう、そのくさりを私にくれるんですか。で、もし私がお役人じゃなかったらどうします？

男の子　あなた、いったいどっちなの？

手品師　ははあ、ぼっちゃんはお役人がこわいんですね。

男の子　こわくはない、こわかないけど、ぼく、お役人に今。用がないんだもの。

手品師　なるほどね。

男の子　ねえ、このくさり、きれいでしょう。ぼくがとてもだいじにしているくさりなんだけど、これをあげるから帰ってください。

手品師　ありがとう。……だけどぼっちゃん、せっかくだけど、私のほうがもっといいくさりをもっているからそのくさりはいりません。だいじにしまっておきなさい。（手品でなにもないところからくさりをひっぱり出す）ほら、ね。

男の子　（おどろいて）あれ、おじさん、どこから出したの？　そのくさり。ふしぎだなあ。

手品師　はっはっは……ふしぎでしょう。

男の子　まるでいつかお祭りの時に見た手品みたいだ。

手品師　ほら、見ていらっしゃい。（と、くさりを見えなくしてしまう）ほら、なくなった。

男の子　あれ。うまいなア……おじさん、おじさんは、手品師なの？

手品師　そう。手品師ですよ。
男の子　なあんだ。それで安心した。
手品師　安心？　どうしてです。
男の子　ううん、どうしてでもないけど。……ねえ、おじさん、もっと手品をみせてよ。
手品師　私の手品が見たかったら私といっしょにお仕置きを見にいらっしゃい。
男の子　どうして？
手品師　お仕置場でいろんな手品を使いますから、見にいらっしゃい。
男の子　お仕置場で？
手品師　そうです。あすこにはきょう王女さまのお仕置きがあるから見物人がたくさんくるでしょう。
男の子　でも、その人たちはお仕置きを見にくるんだよ。
手品師　ええ、だからそのお仕置きがおわってみんながゾロゾロ帰りはじめたときに、私はそのまんなかに、飛び出すんです。
男の子　それで？
手品師　それで大きな声で、「さあさあ、お立ち合いのみなさま、ご用とお急ぎのない方はちょっとお待ちください」ってどなるんです。
男の子　すると、どうなるの？
手品師　するとみんなは立ちどまって私のまわりにあつまってくるにきまっています。そこでまたこうどなるのです。「ここにひかえましたるは、おなじみの手品師でございます」――するとだれかが「手品をやれ」っていうにきまっているんだ。
男の子　だれもそういわなかったら？
手品師　だいじょうぶ、かならずいうにきまっているんです。そこで「では、はじめは小手調べ、五ツ玉のあしらいでございまあす」（玉を五ツ出して身がまえる）
男の子　それで？
手品師　（急にやめて）そうだ、何時ごろかしら。
男の子　ねえ、おじさん、その先やって見せてよ。
手品師　それより何時かな。（まどからお城の時計をのぞく）おやおや、これはたいへんだ。早くいかないといい場所がとれなくなってしまう。
男の子　ねえ、おじさん、見せてよ。

手品師　だからお仕置きを見にいけばいいじゃないの。

男の子　でも、ぼく、おるすばんなんですもの。おかあさんが帰ってこなけりゃ外へ出られない。

手品師　そうか、そりゃおかわいそうだね。

男の子　ねえ、おじさん、帰りに寄ってちょっとでいいから手品見せてね。

手品師　今煮ている豆をくれますか、私は豆が大すきなんです。

男の子　うん、そのころになれば煮えるからあげる。たくさんあげるから帰りに寄ってね、きっとね。

手品師　ええ、ええ、きっと寄りますよ。そのかわり豆をとっておいてくださいよ。

男の子　うん、だいじょうぶ、たくさんとっておくからね。

手品師　じゃ、またあとでね。お仕置場はこの道をまっすぐにいけばいいでしょう?

男の子　ええ。この道をまっすぐにいって二つ目の角をまがればすぐそこだよ。

手品師　ありがとう、ぼっちゃん。じゃ、あとでね。

手品師、いってしまう。男の子、それをまどから見送る。そして、なべのところへ帰ってきてそれをかきまわす。上手の戸が細目にあいて王女が声をかける。

王女　ぼっちゃん。

男の子　(ふりかえる)あ、王女さま。今のは手品師でしたよ。ぼく、はじめのうちは、お役人が王女さまをさがしにきたのかと思ってとってもびっくりしちゃいました。

王女　そう。

男の子　あと三十分で十二時になります。あと三十分間、だれがきても、そのへやにはいれませんから、安心してかくれていてくださいね。

王女　ありがとう。私を助けてくれたら、たくさんごほうびをあげますからね。

男の子　いいえ、ごほうびなんかどうだっていいんです。こんなにきれいでやさしい王女さまですもの、いくらでもかくしてあげます。(戸のところへいく)さ、き

たないけれどその寝台にもぐってください。

男の子、戸をしめてまどから外をうかがう。そしていすを戸の前に持ってきてすわる。それでも落ちつかずあたりを見まわし、ほうきを持ってくる。うでまくりをしてほうきをかまえ、いすにすわる。

——間——

まどから近所のむすめが顔を出す。

むすめ　ねえ、なにしてるの。

男の子　（知らぬ顔をしている）

むすめ　なにすましてるの。

男の子　（きこえないふりをする）

むすめ、戸口よりはいってくる。

むすめ　なにしているのさ。

男の子　なにをしていたっていいじゃないか。

むすめ　ねえ、お仕置き、見に行かない。

男の子　お仕置きを？

むすめ　ええ。みんな見にいくわ。いっしょに、いかない？

男の子　いやだよ。ぼく、ご用をしているんだもの。

むすめ　いいじゃないの。

男の子　だめだよ。……今ぼくは豆を煮ているんだもの。（なべのほうにいく、そしてかきまわす）ほら、もうじき煮えるだろう。豆がこげるといけないもの。

むすめ　ね、あんた。今ここでほうきなんか持ってなにしてたの？（と、上手の戸のまえにいく）

男の子　（あわててそのほうにいき）だめだよ、そんなところへいっちゃ。

むすめ　どうして？

男の子　どうしてもだめなんだ。（戸のまえに立ちふさがる）

むすめ　おかしな人ね、なにかあるの？

男の子　なんにもないさ……ただ、おかあさんが今、病気でねているからだよ。

むすめ　あら、おばさんご病気なの？　ちっとも知らなかったわ。じゃ、ちょっとおみまいしていこうかしら。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com